

ショートメッセージ

2022年10月9日(日)「神殿建設のはじまり」

聖書箇所：エズラ 3：1-13

暗唱聖句：主の神殿の基礎が据えられたので、民も皆、主を賛美し大きな叫び声をあげた。

(エズラ 3：11)

今週の聖書教育誌の週題は「神殿建設のはじまり」です。

**3:1 第七の月になって、イスラエルの人々は自分たちの町にいたが、民はエルサレムに集まって一人の人のようになった。**

ユダヤ暦の第七の月は「年を数えるための新年」ティシュレイの月と呼び、1・2日は新年祭、10日からは贖罪の日(キム・ヨプール)、7~12日は仮庵祭(スコット)を守り、22日は律法祭として一年かけて聖書を読んでいく始まりの日として現在に至るまでこの祝祭を守っておられます。また、ユダヤ暦は12カ月制の太陰暦で西暦の9月~10月にあたる月を新年としています。

つまり、第七の月とは新しい年の始まりということになります。バビロン捕囚から解放(紀元前538年)されて帰還した人々はひとまずはそれぞれの帰る場所に一旦は落ち着いたことでしょう。65~70年ぶりに故郷イスラエルの地を踏んだ人々の思いは如何ばかりかと思わされました。

彼らは帰還した最初の新年(紀元前537年)を迎えたその時にエルサレムに集まって心を合わせて主なる神に祈り、一人の人のようであったと聖書は私たちに伝えます。目を閉じて、その光景を思い浮かべてみますと、それまでの長く辛い日々が思い出されて涙がこぼれるほどです。彼らが集まったのは主なる神に礼拝をささげるためでした。けれども礼拝しようと集まった彼らの目の前の神殿の丘は徹底的に破壊されていました。それでも若き日に壮麗な神殿の記憶が残っている長老たちに導かれて「その昔の土台の上」に祭壇を築いたのでしょう。神殿を守る城壁もありません。帰還した人々を快く思わない「その地の住民」たちから妨害される脅威もありました。それでも彼らは心を合わせてひとつとなつて聖書の示す律法に従い、主なる神に礼拝をささげたのです。

70年にもわたるバビロン捕囚は長く辛く、民族としての誇りさえバビロンの文化に否応なく同化していくなかで失われても不思議ではありません。けれどもイスラエルの民は真の神をダニエルのように忘れることなく、この苦難の時期に聖書の編纂、シナゴーク礼拝というイスラエル民族としての信仰の礎を改めて築き上げていたのです。こうしてエルサレムでの神殿礼拝を祈り求めて夢見ていた彼らにとってその日は特別な日となったのです。

**3:6 第七の月の一日に、彼らは主に焼き尽くす献げ物をささげ始めた。しかし、主の神殿の基礎はまだ据えられていなかった。**

彼らは聖書の律法に従って新年の初めの日から礼拝を始めたのでした。申命記・民数記などに記された祝祭を通して礼拝をささげ続けたと聖書は語ります。まさに礼拝が彼らの生活の中心であることがわかります。荒れ果てた神殿の丘に立った人々はこの礼拝から改めて神殿を再建することを誓い合ったのです。

**2:68-69 エルサレムの主の神殿に着くと、家長の幾人かは、神殿をその場所に再建するために随意的な献げ物をささげた。彼らはそれぞれ力に応じて工事の会計に金六万一千ドラクメ、銀五千マネ、祭服百着を差し出した。**

これは金を現代の貨幣価値に換算すると1ドラクメは金4.3gですから金262.3Kgは20億円くらいに相当します。ですから差し出された献げ物は全部で30億円くらいにはなるのでしょうか。人々の尊いささげものにより神殿建設のための石材や木材を集める準備が整いました。

**3:8 エルサレムの神殿に帰った翌年の第二の月に、シェアルティエルの子ゼルバベルとヨツァダクの子イエシュアは彼らの他の兄弟たち、祭司とレビ人、および捕らわれの地からエルサレムに帰って来たすべての人と共に仕事に取りかかり、二十歳以上のレビ人を主の神殿の工事の指揮に当たらせた。**

こうして紀元前 538 年に帰還を果たし、翌年の紀元前 537 年の新年・第七の月に礼拝に集まり、次の年の紀元前 536 年、かつてソロモンが神殿建設を始めた第二の月(西暦では 5 月ころ)に合わせたのでしょうか。神殿建設のための資材が集まり各々を任に当たらせて神殿建設の工事を第二の月から始めたと聖書は記します。

**3:10-11 建築作業に取りかかった者たちが神殿の基礎を据えると、祭服を身に着け、ラッパを持った祭司と、シンバルを持ったアサフの子らであるレビ人が立って、イスラエルの王ダビデの定めに従って主を賛美した。彼らも「主は恵み深く、イスラエルに対する慈しみはとこしえに」と唱和して、主を賛美し、感謝した。主の神殿の基礎が据えられたので、民も皆、主を賛美し大きな叫び声をあげた。**

イスラエルの神殿はモーセによるエジプトから約束の地カナンへの旅の間に宿営した場所に設けられた幕屋が原型です。そこには年に一度、大祭司しか入れない至聖所があり「契約の箱」が置かれていましたが、今はその「契約の箱」は失われてしまいました。けれども、「神殿の基礎を据える」ことは「契約の箱」を運び入れることと同じ意味をもつものとして、彼らは「主は恵み深く、イスラエルに対する慈しみはとこしえに」と声を上げ、主を賛美し、感謝しました。

**3:12 昔の神殿を見たことのある多くの年取った祭司、レビ人、家長たちは、この神殿の基礎が据えられるのを見て大声をあげて泣き、また多くの者が喜びの叫び声をあげた。**

若い日に壮麗なソロモンの造営した第一神殿を知る者にとっては、あまりに小さく見劣りするとして涙を流し、他方ではバビロンで生まれ育った若い世代は、ついに神殿とわたしたちの国が再建されることを素直に喜び歎きの涙を流しました。世代によって同じ体験をしても神殿を巡る感情には深い違いがありました。しかし、この神殿建設の始まりの一步はイスラエル民の世代を超えて新たな共同体の第一歩となり得たのです。

現代の私たちにとっても教会の建設は大きな喜びがあります。帰還したイスラエルの民がささげたように私たちも我が家を建設するように惜しみなくささげてきました。世界をみるとメガチャーチといわれる何万人も入れる会堂もあります。ヨーロッパの各都市にある大聖堂には圧倒されます。けれども、会堂の大小で比較することは意味のないことです。そこに「神殿の基礎が据えられている」「主は恵み深く、イスラエルに対する慈しみはとこしえに」という賛美と感謝のあるところに主は臨在されています。ここにおいて礼拝するときに私たちは共におられる主を体験し、主なる神との出会いが実現し、同信の友と一緒に共同体が生まれ形成されていくのです。こうして神と向き合って教会を建て上げていくときに神の栄光が教会に満たされるのです。

● 分かち合い

- ・あなたが教会の礼拝に初めて出席したときを覚えていますか。どのような感想を持たれましたか。
- ・人が心を合わせた時には不思議な力を感じます。丁度、合唱でひとつの声となったようにです。主の前に心を合わせる大切さと喜びを分かち合ってみましょう。